二次元ドリームマガジン

2D DREAM MAGAZINE

Volume 115

18 未満

今号の Special Fetishism Series 特集

メスガキわからせ

新連載!!

神殻戦姫 アージュスレイブ

～淫紋に堕ちるエルフ姉妹～

筑摩十幸×catwalkNERO最新作!

試し読み版

CONTENTS

ページ 6 Volume 115

表紙イラスト／あおいまさみ
本誌でははじめまして。「メスガキわからせ」もすっかり定番のテーマになりましたね。

超昂神騎エクシール ～双翼、魔悦調教～ THE COMIC
[漫画]SHUKO [原作]アリスソフト [原案]峰崎龍之介

運動不足解消のためにスピンバイクを買いました。ハンドルがスニーカー干すのにとても最適です。(SHUKO)

連載漫画

神殻戦姫アージュスレイブ ～淫紋に堕ちるエルフ姉妹～ 前編
[小説]筑摩十幸 [挿絵]umiHAL [原作]桜沢大

「牛が出るゲームはいいゲーム」古事記にもそう書いてある。(筑摩十幸)

新連載

●連載&読み切り漫画

メスガキ魔王サタナの躾け
[漫画]ぱふぇ

久しぶりに貧乳を描いたら全然描けなくなってて、貧乳を描き終わったら巨乳が描けなくなってました…(ぱふぇ)

ふたなり魔法少女、メスガキ小悪魔を成敗
PICK UP
[漫画]水瀬揺光

ふたなり娘がメスガキをわからせても良いのではと。楽しんでいただけたら嬉しいです。(水瀬揺光)

特務戦隊カラフル・フォース
[漫画]火愚夜

生意気なメスガキを叩いて躾とす！ 王道ですが楽しいですね。(火愚夜)

メスガキエクソシストをわからSEX！
[漫画]美岳

昔から読んでいた二次ドリで描くことができ光栄です。わからせはいいものです！(美岳)

マチマチな関係
[漫画]吸斬

もし魔法が使えるなら身体を空中に浮かせて睡眠をとってみたいです。朝起きて目の前に天井があったら楽しそうです。(吸斬)

●連載&読み切り小説

メスガキ魔法少女シャルロッテちゃん
カラー小説
[小説]上田ながの
[挿絵]あおいまさみ

分からせたい！ いや、メスガキになって分からせられたい！ そんな想いをぶつけました！(上田ながの)

メスガキ魔王に、わからせ制裁！
カラー小説
国とか治めなくていいから肉便器やってろ
[小説]狩野景
[挿絵]はやにぇR

昨年末の事ですが、脳梗塞で入院しました。ナースさんの前でおまる使用が人生最大の羞恥プレイでした。(狩野景)

俺をパーティから追放したメスガキ勇者を、わからせ調教した件
[小説]栗栖ティナ
[挿絵]もりの

ちょうど最近のマイブームだったメスガキわからせの短編、楽しく書かせていただきました。(栗栖ティナ)

煌翼天使ユミエル
プリズンオブサクリファイス
[小説]黒井弘騎
[挿絵]白う～凪い

二階堂のセリフは考えるのがすごく難しいのですが、クズ学生のセリフはすぐ浮かんできて自分の品の無さを思い知らされましたね……。(黒井弘騎)

鬼姫魑迦陀の罪と罰
[小説]斐芝嘉和
[挿絵]Lとらっぷ

いまさらながら〇プソリートに嵌っております。咽せる。12話もアリ。「壊れるロボット」はいいですね！(斐芝嘉和)

天才魔導少女の敗北絶頂
～高慢メスガキへ"分からせ魔法"～
[小説]遠野渚
[挿絵]ゴールデン

メスガキいいですよね！ 大好きなのでネットリとじっくりと調教させてもらいました！(遠野渚)

●特選コラム

二次元GスポットXtasy　夢崎
ちゆ12歳のひとりえっち　ちゆ
官能小説執筆汁まみれ ～作家のココロ～　筑摩十幸
美少女コミック雑誌のゲンバ　稀見理都

※にゃるらのブログ出張版は都合により休載いたします。

●今号の特集

メスガキわからせ特集

うあっ…
ううぐっ
んああっ
はっ…くううっ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
あっ
ヂュプ
ヂュプ
ヂュプ
蒼の戦乙女は、犯されるほどに淫らに艶やかに…
05
超昇神騎
BEAT VALKYRIE DOBEAL
エクシール
～双翼、魔悦調教～
THE COMIC
原作／アリスソフト
漫画／SHUKO
原案／峰崎龍之介

パンパン
ああああっ
パンパン
くく……いいぞ
そうやって締め付けていろ……

ひぐっ
ズズッ
ズッ
いたっ…い
んっ
パッ
パッ
また射精るぞ……！
そ そんなまた!?

あっ
うあっ
ドプッ
ドプッ
ドプッ
ビュルッ
ビュッ
ビュッ
はー
はー
ビクッ
ビクッ
ズリッ
ズリッ
ドロッ

ははは！
いい声で啼くな
エクシール
だが
まだまだ
これからだ
バサッ
ブルンッ
グイッ
ドッ
あっ…

ゲッ
うあああああ！
ふ深いい……！
ズッ
プウンッ
ふ……
いい顔だ
あっ
あぁ…
しかし
そろそろ別の顔も
見てみたいところだ
どれ
パアアー
少し身体を
楽にしてやろう

ズボッ
ズボッ
ズボッ
ズボッ
!!
ビクッ
うっ
また魔術を……!?
痛みを消した
これで
お前も少しは
楽しめるだろう
こ
これは……!?
ニヤリッ
嬉しいか
エクシール？

ふざけないで……

こんなの嬉しいわけ…

ズ〜〜ッ

ブリブリ

っああ!?

あっ

ヌポ〜

あっ♡

あっ♡

ヌポ〜

ふうっ

あんっ

ドチュッ

ひいんっ

ぢゅぷ

ドチュッ

動くたびに…
ズキッ
ズキッ
大した淫乱だ
そんなこと…！
甘い
痺れが…っ！
グチュッ
ちゅ
グポ
ちゅ
グプッ
ズブブ
ズブブ
ふっ
敵に処女を
奪われた直後に
そんな声が出せるとはな
あっんん
ああ……っ！

ゲイッ
はあっ
んっ
いやっ…
んあ！
お腹の奥が熱い…！
ズプッ
ズプッ
あうっ
パンッ
パンッ
激しっ…
あんっ♥
あんっ♥

こちらも可愛がってやろう
ちゅううう
きゃふう!
くあっ
んっく
レロ
レロ
あっあっらめっ…
ズッ
ズプッ
ズチュッ
おっぱい吸っちゃダメエ!
お願っ…ふうっ
ぢゅるるる
ちゅっ
だめだめだめ…っ
ズンッ
ズプッ
んあっ…
はあっ…んくっ
ズプッ
ズプンッ
ズッ
ズンッ

神殻戦姫
アージュスレイブ
～淫紋に堕ちるエルフ姉妹～
前編
最新作！
catwalkNERO×筑摩十幸
変身ヒロイン姉妹姫が魔獣のえじきに！
小説 NOVEL／筑摩十幸
挿絵 ILLUSTRATION／umiHAL
原作 ORIGINAL／桜沢大

深い森に包まれたエルフィーヌ聖皇国。そこではエルフと人間族が共存し、平和的に繁栄していた。魔力と知恵を持つエルフ族と、適応力と商才に優れる人間族は、互いの欠点を補う形で融和し、今では大陸でも一、二を争う豊かな国となっていた。

その豊かさの中心が『アーシェ』と呼ばれる古代遺跡だ。遺跡から掘り出される鉱物、魔法具は余所では入手困難な貴重品であり、非常に高い値段で取引されていた。

だが豊かさは欲望を生み、欲望はさらなる富を求める。それは人間でもエルフでも、はたまた他の種族であろうと変わりはない。欲望の巨大な渦が回り始める時、それにリンクするように何者かが目覚めようとしていた。

遺跡を見下ろす丘の上に不気味な一団があった。夜明け前の深い闇の中に、いくつもの紅い目がギラリと光を放っている。

「行けい、我が兵たちよっ。遺跡の技術を奪うのじゃあ」

「ハッ、ゾドム様！　ギギギィィ～～～～～ッ！」

ゾドムの命令を受け、仮面をつけた黒ずくめの小鬼たちが遺跡の入り口に向かって殺到する。人間の子供くらいの小柄なゴブリンだが、手には剣やナイフなど鋭い凶器が握られていた。

「そうはさせないわよ、穢らわしいゴブリンども」

その時、エルフの守備隊が立ちはだかる。先頭に立つのは金髪のうら若いエルフの少女剣士だ。

「貴様、リリーナ姫か。じゃがそれだけの兵で何ができる？」

ゾドムが勝ち誇ったように嗤う。ゴブリン軍団は百匹以上だが、対するエルフの守備隊はわずかに一〇人程なのだ。

「フン、アンタたち下等種族なんか私ひとりで十分よ。蹴散らしてやるわッ！」

挑発的な笑みを浮かべると、猛禽（もうきん）のごとく猛然とダッシュする。

「ギギギィッ！　馬鹿め、ひとりで突っ込むとは」

「ブチコロスゥゥッ！」

悪鬼の群れがリリーナに向かって飛びかかる。その様は殺意に満ちた黒い津波。個々は小さくとも数の圧は侮れない。

「うわ、姫様、危ない！」
「援護だ、援護！」
弓矢と魔法弾がリリーナ姫の頭上を飛び越えて、ゴブリン軍団の先鋒に着弾した。
ズドドドドドォォッ！
「ギイィィィ～～～～～～～～～～～ッ！」
皇女を守る壁のように爆炎が噴き上がり、ゴブリンの侵攻を押し返す。
「てりゃあぁぁっ！」
怯んだところに、楔のごとく斬り込むエルフの姫騎士。多数を相手にしても一歩も退かないその勇姿は、まさに闘いの女神といったところか。
「私の国から出て行きなさいッ！」
「ぐわっ！」
「ぎゃぁぁっ！」
鋭い剣先が煌めくたびゴブリンたちの腕や脚を斬り刻み、健康的な太腿が接近してきたゴブリンを蹴り飛ばす。さらにはポニーテールも鞭のようにしなってゴ

ブリンの目元を薙ぎ払って視界を妨げる。身体の隅々まで一寸の無駄のない、文字通り一騎当千の連続攻撃だ。

「グァァッ！」

「つ、強すぎるぅっ！」

たちまちゴブリンの軍勢は大崩れとなった。わずかひとりの姫騎士に対して、這々の体で逃げ始めるのだ。

「このエルフィーヌ第二皇女リリーナ・エンゲルンがいる限り、お前たちの好きにはさせないわっ」

ポニーテールにまとめたブロンドをたなびかせ、颯爽と勝ち名乗りを上げるエルフの姫。

敵を見下ろす真紅の瞳は宝石のように輝き、ツンッと尖った長耳と鼻筋は気位の高さを示している。さくらの花びらのような唇から放たれる美声はしかし、勇ましく敵を圧倒するのだ。

「おお。さすがリリーナ姫様」

「突っ込みすぎるのはアレだが、やっぱり強い」

エルフの兵士たちは自分より歳下の指揮官を、尊敬と羨望の眼差しで見つめた。
紅い軽装服を盛り上げる双乳はたわわに膨らみ、鍛えた腹筋が生み出すウエストは見事なまでにくびれている。腰から太腿にかけてのラインは女性らしい丸みに加えて、シャープな健康美が溢れ出していた。
強さにおいても美しさにおいても、エルフィーヌ皇国軍を象徴する中心的存在なのである。
「おのれぇ、リリーナ姫。ならばこれはどうだ!?」
「ブモォォッッ！」
姿を現したのは巨大な斧を持つ牛の怪物ミノタウロスだ。身長はリリーナの倍以上、体重も牛一頭分はあるだろう。歩くたびにズシンッと地響きがするほどだ。
「いいわ、相手をしてあげるっ」
先手必勝で斬りかかるリリーナ。
ガキンッ！　ビシッ！　ザシュッ！　キィィンッ！
一気に間合いを詰めて超高速の斬撃を叩き込む。だが……。
「あっ!?」

敵は普通のミノタウロスではなかった。傷口からは金属のパイプや装甲がのぞき、メタリックな光を放っているのだ。その強固な装甲に弾かれ、ダメージを与えることができない。

「これは機械⁉　遺跡の技術を使ったのね？」

「ブモォォォッ！　その通りだ。我らが聖地を返せぇぇっっ！」

反撃の戦斧（せんぷ）を超高速で振り回すミノタウロス。発生した竜巻がリリーナを襲った。

ゴオオオオオオォォォォォォォッッ‼

「危ない、リリーナ様！」

「きゃあぁぁぁぁっ！」

岩を抉り、樹木を切り倒す。凄まじい暴風にエルフの皇女は吹き飛ばされてしまった。

「ヒャヒャヒャッ！　見たか我が機獣の力を！」

「ああ、姫様が……」

濛々（もうもう）と立ちのぼる土煙で、リリーナの姿は見えない。跡形もなく消し飛ばされ

てしまったのだろうか？
（なんてね。わざと喰らったのよ）
リリーナは少し離れた木陰に身を隠していた。
「相手が機獣なら、手加減は無用ねッ。変身して一気に片をつけてやるんだから。ジン、きてっ！」
気合いを入れて拳を突き出し、精神集中。
「はいはい、姫様、お呼びで」
白いキツネのヌイグルミのようなキツネのような妖精が現れて、リリーナのそばにピタリと寄り添う。
「よぉし、いくわよ！　アインド・リーゲン！」
シュバアァァァァァッ！
心と心、身体と身体が重なりあう。リリーナの甲冑が光の粒子となって周囲を舞い、マスコット妖精の身体が一瞬、少年の姿になってから消えた。辺りを虹色の空間が包み込んでいく。そこへ……。
「リリーナ姉様ぁっ」

「へ？」

虹色空間に穴を開けて、コック帽とエプロンを身につけた幼い少女がトコトコと駆け寄ってきたではないか。

桃色の髪や太めの眉には年相応の幼さが見て取れる。胸の膨らみもささやかで、腰のくびれもほとんどない。神秘的な翡翠色の瞳はいたずらっぽい笑みを浮かべて、同性のリリーナから見ても愛らしいと思うのだが……。

「わ、ククルシア様⁉　どうしてここに？」

「私、今おやつ作りに凝ってまして、『鯛焼き』というモノに挑戦してみたんですの。美味しく焼けましたのでぜひ姉様に食べていただきたくて、とんできちゃいましたの」

ククルシアがニコニコ微笑みながら、どこからともなく取り出した魚の形をした焼き菓子をリリーナに手渡そうとする。作りたてなのだろうか、温かそうな湯気まで立てて、甘い匂いが変身空間に広がった。

「ちょ、ちょっと。今は変身（バンク）の最中だから。後にしてもらえると嬉しいんですけど」

「ええ～っ。せっかく焼きたてなのにぃ、残念ですの」
恨めしそうな上目遣いで柔らかそうな頬をプウッと膨らませ、可憐な唇を3の形に尖らせるククルシア。
「ご、ごめんなさい。終わったらいただきますから」
「わかりました、約束ですの～」
納得したのか、ククルシアはきた時と同様に、虹色空間から唐突に姿を消した。
「調子くるうなぁ。ってそれどころじゃない。ジン、続きよ！」
「了解です。リリーナ……姫様ッ」
（うあぁ……ジンの声が……私の中から……響いてっ）
凄まじいエネルギーの奔流が全身の血管と神経を駆け巡り、恍惚が脳内を埋め尽くす。仰け反る細腰に、強張る指先に、反り返る爪先に……光のリボンが螺旋状に巻きついてくる。さらにリボンは乳房を上下左右から挟み込み、プリッとしたお尻にピタァッと張りついて真紅のスーツと化した。
（すごいこれ……ああ……身体があつい……ッ！）
全身の細胞一つ一つがビリビリと歓喜に震え、目の前が桃色に染まる。その強

烈な高揚感が、やがて灼熱の閃光となってリリーナの身体を縦一直線に貫く。目元を紅いマスクが覆って……。

「閃烈にして流麗！　神殻戦姫（しんかくせんき）アージュフラム、ここに推参！　聖地を穢す邪鬼ども、正義の前にひれ伏しなさいっ！」

天使が降臨するかのように大地に降り立つアージュフラム。

「あれは神殻戦姫⁉」

「オオッ！　神殻戦姫がきてくれたぞ」

その神々しい姿に、敵も味方も刻を忘れて魅入っていた。

「グ、グヌウ、出たな神殻戦姫。いでよ、仮面兵ども！」

ゾドムが杖を振りかざして絶叫すると

「ギィィィッ！」

三十人近い仮面の兵士たちが新たに現れ、一斉に飛びかかった。

「数を頼みの抵抗など無駄と知りなさいっ、てりゃあぁっ」

気合いの咆哮とともに、炎を噴く剣がアージュフラムの手の中で実体化した。

「はあぁぁっ！」

高慢ちきなクソガキ令嬢に
教育的★性裁!!!
メスガキ魔法少女
シャルロッテちゃん
小説/NOVEL 上田(うえだ)ながの
挿絵/ILLUSTRATION あおいまさみ

「ゴアアア!!」

街中に現れたのは一体の化け物だった。

一見するとタコのようにも思える怪物だ。大きさは三メートルほど。そんな巨大怪物の唐突な出現に街を歩いていた人々が悲鳴を上げる。するとタコ型怪物はその声に反応するように、長い触手をうねらせ、伸ばした。人々の身体を触手が締めつける。捕らえられた人々の口から苦痛の呻(うめ)き声が漏れた。だが、それは本当に僅(わず)かな時間のことでしかない。すぐに締めつけられた人々はぐったりとし、意識を失った。

「大変だ、精気を吸われてる！　あのままじゃみんな死んじゃうよ！」

そんな有様を見たリッツが声を上げる。

大きさは僅かに三〇センチほど、背中には羽が生えたまさに妖精としか形容しようがない少年だ。

「みたいね」

リッツの言葉に一人の少女が頷く。

ロングストレートの金色(こんじき)の髪を背中まで伸ばした少女だ。切れ長の目に、真っ

直ぐ通った鼻筋、そして艶やかな唇――小柄な身体と相まって本当に人形のようにも見える少女である。名前はシャル。鬼龍院シャル――大財閥鬼龍院家の令嬢である。

父が経営する私立鬼龍院学園のブレザータイプの制服に包み込まれたその姿は、地上に本物の天使が舞い降りて来たかのように可愛らしい。

怪物が出現している状況だというのに、シャルはまるで動じている様子も見せない。地獄に降臨した女神のようにさえ思える程の気高さを、見ている人々に感じさせる姿だった。

「シャル――早くあのジャークをなんとかしないと！」

リッツが怪物を指差す。

ジャーク――この世界とは違う魔法界に住まう悪い魔法使いが創り出した精神生命体だ。人間に取り憑くことでその人間が持つ本能を肥大化させ、怪人へと変貌させる存在である。

魔法界はジャークを創造した魔法使いを捕らえることには成功した。けれどその際、魔法使いはジャークを人間界に解き放ってしまったのである。事態を重く

見た魔法界は、ジャークを浄化するために無数の魔法使い達を人間界へと送り込んだ。リッツもその一人である。

しかし、魔法使い達は人間界ではまともに魔法を使うことができない。魔法界とは違い、人間界には魔法を使うために必要な魔素であるマナが圧倒的に不足しているのだ。だから魔法使い達は契約を結んだ。ジャークを倒せる存在――魔法少女を創り出すための契約を！

「シャル！　頼むっ!!」

そしてリッツと契約を結んだのが――

「分かってるわ」

シャルである。

「ピュアピュアマジカル☆ティンクルリン♪　リンリンマジマジポワポワリン♥　みんなを守る力をちょうだい♪　マジカルパワー☆メタモルフォーゼ♪」

可愛らしい唇から魔法の言葉が紡ぎ出された。

瞬間、シャルの身体が強烈（きょうれつ）な輝きを放つ。化け物さえも「ゴアッ!?」と戸惑うほどの光だ。そんな光の中でシャルの肉体が変化する。

身に着けていた制服が光の粒子となって消えた。生まれたままの姿が曝(さら)け出される。平べったいといっても過言ではない程慎ましやかな胸に、あまり括(くび)れがない腰、そしてムチッとした太股――完全なる幼児体型だ。けれど、幼さを感じさせるそうしたスタイルさえも、人形のように美しいシャルにはよく似合っている。

そうした肢体を光が包み込んだ。その光が衣装へと変化する。赤と白を基調とした、まるで道化師を思わせるような魔法少女衣装に！　同時に金色だった髪色が桃色に変化した。ストレートだった髪が魔力によってツインテールに結われる。まさに変身。リッツとの契約により、財閥令嬢鬼龍院シャルは――

「悪い奴からこの世を守る魔法少女シャルロッテ――街のみんなを救うため、今ここにす～いさん♪」

魔法少女シャルロッテとしてタコ型怪物の前に降り立った。

「ゴアアア」

唐突な変身に化け物が怯(ひる)む。

「魔法少女……これで、助かる？」

恐怖に慄(おのの)いていた人々の顔に、希望の光が灯った。

「よし、シャルロッテ！　怪人を浄化してみんなを助けよう!!」
リッツが鋭い視線で怪人を見据える。
「は？　イヤよ」
そんなリッツに、シャルロッテは容赦ない一言を口にした。
「――え？」
リッツの表情が凍り付く。
「だって私、あんなキモイのに近づきたくないし。折角の可愛い服があんなのに近づいたら汚れちゃうでしょ。絶対イヤ～」
「絶対イヤって……でも、契約したとき話したよね？　魔法少女の力がないとジャークを浄化できないって」
「聞いたけど、まさか、怪人があんなにキモイなんて思ってなかったのよね～」
「いや、でも、戦わないと沢山の人が苦しむことになるんだよ！　そのことも話したよね!?」

「でも、別に誰かが傷つこうがどうでもいいし～」
「どうでもいいって！　だったらなんで契約したんだよ！」
「なんでって、もちろん、魔法少女に変身したかったから♪　魔法少女は女の子の憧れだもん」
そう言って可愛らしく笑うと、スカートポケットからシャルロッテはスマホを取り出し「んふ♥」と笑顔を浮かべてパシャッと一枚写真を撮った。
「契約したとき一度変身してるけど……やっぱり我ながら可愛い♪　最高ね！　いつでもこの姿になれればいいんだけど、怪人が近くにいないと変身できないなんて制約があるなんてちょっとした詐欺だよね。だからこそ、折角変身できたんだし、全身も撮りたいなぁ。今撮れたの顔だけだし……あ、そうだっ！」
いいことを思いついた――とでも言うように「マジカルソード♪」と口にする。するとその言葉に反応するように、シャルロッテの手に一本の剣が現れた。花弁をあしらった柄（つか）が特徴的な赤い剣だ。その剣の先端にスマホを着ける。即席自撮り棒の完成だ。
「ピース♪」

切っ先についたスマホに向かってピースサインをする。それと共に魔法を流し込み、スマホのシャッターを切った。

「うんうん、これで全身も撮れた。いい感じ♪」

「いい感じ――じゃないよ！　魔法少女の仕事はジャークの浄化なんだよ！　戦って！　戦ってよ！　みんなを守らなくちゃ！」

リッツが半泣きで縋り付いてくる。

「まったく五月蠅いわねぇ。そんなに守りたいならアンタが戦えばいいじゃない」

「それができたら苦労しないよ！　話したでしょ！　こっちの世界にはマナがないから魔法が使えないって」

「ふ～ん、だったらマナがあればいいんだ」

「それはそうだけど……」

「なら……ティンクル☆マジカル♪　魔法の力よ――リッツにマナを与えなさ～い☆　マジカルソード――シャワー♥」

マジカルソードを振り、魔法を発動する。

キラキラとしたシャワーのようなものが切っ先から溢れ出し、リッツの全身に

降り注いだ。
「あ……これ、力！　力が漲(みなぎ)ってくる！」
リッツの全身が輝きを放つ。
「ほら、それでマナは十分でしょ？　その力で勝手に怪人退治して。私は……ちょっと、そこのアンタ」
呆然(ぼうぜん)とリッツとのやり取りを見ていた会社員風の男性に声をかける。
「へ？　あ、なんですか？」
「ほら、これ」
会社員にスマホを渡す。
「あれ……あの建物をバックに私を撮りなさい」
ちょっとオシャレなカフェを指差した。
「へ？　あ……いや、でも……」
男性は怪物を気まずそうに見る。
「大丈夫、あれはそこの羽虫がどうにかするから」
リッツに対してシャルロッテは顎(あご)をクイッとした。

全軍突撃——!!
ブルードラゴン
突然の魔王軍侵攻から5年
人類は苦境に立たされていた
人間なんてやっちゃえやっちゃえ——♪
イケイケなメスガキをわからせ陵辱!?
しかし——勇者を筆頭に才ある人物が立ち上がり
各地の魔王軍は撤退を余儀なくされていった
魔王の娘 サタナ
メスガキ魔王サタナの躾け
くそーっもう嫌だ
誰だあんなの司令官にしたのは—!?
やってらんねーよ!
ダークナイト
アークオーク
撤退——!!
あっコラ
勝手に逃げるな——!
デビルポーン
漫画/ぱふぇ

ボロ
ボロ
疲れた——
帰りたい——
腹減った
トロルナイト
レーザードラゴン
フロストジャイアント
いてて…
ハリガネゴブリン
寝たい…
も——っ！なんで先に帰っちゃうの——！
もしかしてお疲れ？
ん～♡
連戦だもんねー
疲れとるわ——!!
交代で休ませろよシフトって知ってる？
もうちょっとで突破できたはずなのにさ
おわサタナ姫
アタシが癒してあげよっか♡
骸羅将軍

いたずらはおやめください
魔王様に知れたら殺されてしまいます
骸羅将軍のおじさまもたまってるんでしょ
特別にぃ
サタナがヌイてあげよっか？
上手いんだよ♡
ムリしなくていいよぉ
この姫めぐ～～～
魔王の娘には手を出せないとわかってて
なんてネッ♡
子供にヨクジョーしたの？
アハハハハなに本気にしてんの？
自分の歳考えなよロリコン♡

鉄牛団長
ハラミ君なら Hさせてあげても いいよ♡
オレは姫様 とだなんて そんな…
やだ なにマジに なってんの
アタシぃ チョ――― カワイイ もんね♪
チンポ 大きそう だもん
ギャグに 決まってん ジャン
くそ ムカツク
地獄の剣士
魔王様さえ いなければ
悪魔参謀
大人のくせに シャレもわから ないのぉ?
調子に乗り やがって
トカゲマン
みんな オカズに してるの 知ってる わよ
お前の相手 してて休んで ないんだが!!
ハイハイ 一時間後に 再出撃よ
頭の悪い アンタたちは 戦うしか能が ないんだから
伝令 ――!!!

魔王様が勇者に

討たれました――!!

ざわ

そ…――

バカ…な

あ

アンタたち

今すぐ出撃…

準備なさい

フクシューするわよ

ふる

ふる…

アンタたち なんのマネ!?
ゴッ
アタシは 魔王の娘 いや 新魔王よ!!
無礼者!
そうかい じゃあ
お強い 魔王様は 無礼者を 手討ちに
できるよ なァ!?

ぎっ
この日を待ってたぜ!!
たぁぁぁぁぁぁッ
足いッ引っ張らないで!
裂ける!
おまたが裂けっちゃうううッ
ぐへへ前から一度泣かせてやりたかったんだ
こむうう食い
泣いてないッッ!!
ガキの指揮で戦わされる身になれっつーの
知らないわよそんなことッ

いやああ放せえ!!
へへっ
ガキでも剥いたら雰囲気出るな
くそおぉオマエらあぁッ
あっ
く…
ン…♡
暴れるともっと深く食い込むぞ
んんンー
許…さないわよ
あ♡
はンっ
く…ううう……
ん? ああそうか
この触手は媚薬を分泌するんだっけな
乳首に塗っといてやるよ
ふぃ♡
人間なら即イキだが俺ら魔族にはなぁ
くっアンタたちっ

先っちょがっ
おまたが
ムズムズするぅぅ
放せッ
おろせぇぇ
ン…ふぅ——っ
おろして……
も…許して…よぉっ
ダメに決まってんだろ!!
それで謝罪のつもりかッ!?
あぁ♡あぁ♡あぁ♡

無能魔王に下克上
王座から出産便器に堕ちる姫！

メスガキ魔王に、わからせ制裁！

国とか治めなくていいから肉便器やってろ

小説 NOVEL／狩野景（かりのけい）
挿絵 ILLUSTRATION／はやにぇR

「ふぁ～～～あ」

魔王に即位しての第一声は、退屈そうな大あくびだった。

広大な謁見の間に集結した多種の魔族たちが、驚きに顔を上げる。玉座には、まだあどけなさの残る少女がしどけなく姿勢を崩して座っていた。

剥(む)き卵のような美貌(びぼう)は小生意気な表情を浮かべ、口の端から尖った八重歯を覗かせる。

吊り目気味の強い眼差しで、幼げな外見から侮ることを許さぬように、跪(ひざまず)く者たちを睥睨(へいげい)していた。

赤い縁取りがなされた黒地のドレスを、フリルで飾った純白のアンダーウェアの上にまとう。

小柄でまだ発育途中といった幼児体型気味の身体つきだが、胸だけはもうすでに熟して、たわわな膨らみを誇示していた。

豊かな白銀の髪を頭部の左右で房に纏(まと)め、瞳の色と同じ紫色の角を髪飾りのように生やす。

胸元に浮かぶ紋様は、すべての魔族に絶対の服従をもたらす魔王の証。

顔を上げた魔族たちがその愛くるしい容姿に、思わずため息を漏らす。
彼女こそが、本日即位したばかりの新たな魔王、ピアリスであった。
「姫……いえ、我らが新たなる魔王、ピアリス陛下。皆にご即位のお言葉を」
あくびを披露しただけで皆を一瞥すると、興味を失ったように手に持った携帯式魔導情報端末機、魔フォンをいじり始める。
そんなピアリスに、漆黒の軍服と裾の長いコートに身を包んだ、長身の魔人が言葉をかける。
冷徹な顔立ちをした黒髪に尖った角が特徴的な、セバスゴールという先代魔王に仕えた軍師だ。
「は～、魔王なんかべつになりたくなかったのに、お父様ってば勝手に死んじゃうんだもん」
かったるそうに呟く言葉に一同がざわつく。だが新たな少女魔王の口は止まらない。
「また調子に乗りまくって、敵陣に一人で突撃してって、勇者パーティの総攻撃食らったんでしょ？　ほんとらしいっていえばらしいわよねぇ」

人間と違って家族への情が薄い魔族とはいえ、偉大な魔王であった父親の死を面白がっているような言い様に、一同から驚きと怒気があふれ出た。

しかしピアリスはそれをフンと小馬鹿にしたような笑みで一蹴して、言葉を続ける。

「まあでもせっかく跡を継いだんだし、みんなこれまで以上にあたしのことを敬うように。わかっていると思うけど、魔王の命令には絶対服従だからね。以上！」

父の死と共に発現した魔王の紋章を見せつけるように胸を張り、悪巧みを思わせる笑みをニタリと浮かべて命じる。

たとえどのように理不尽な行いをされても、その紋章を受け継いだ彼女に、すべての魔族は逆らうことができないのだ。

「人間との戦は未だに継続中です。ピアリス様には、そちらの指揮を執っていただきたく……」

魔フォンの画面に視線を戻す少女魔王に、漆黒の軍師が進言する。

「戦争とかあたしが始めたわけじゃないし、ダルいんであなたに全部任せるわ、セバスゴール。どうせいままでだってお父様は先陣切って暴れるだけで、あなた

が全部指揮してたんでしょ？　好きにすればいいわ」
「……御意」
それは確かに事実だが、軍師としては新たな魔王に、先代を失って意気消沈している軍を鼓舞して欲しかった。しかし投げかけられた素っ気ない言葉に、不満を呑み込み拝命の礼を示す。
「それにしても、こうして玉座から眺めてみると、どいつもこいつも冴えない顔ばかりよね～。戦うことと食べることとエッチなことしか頭にない、お父様と同類って感じ。こんなのばっかり相手にしていると、あなたも苦労するでしょ？　セバスゴール」
「……」
クスクス笑いで皆を見回していうピアリスに、セバスゴールは肯定も否定もせず無言で顔を伏せ続ける。
怒気を発しながらも、魔王に逆らうわけにもいかず跪く魔族たちへ見せつけるように、白銀髪の少女魔王はだらしなく脚を崩して姿勢を変えた。
「あは、なになに～？　気になっちゃった？　あたしの脚。それとももっと奥の

方とか？」

ゆったりとした玉座の上で黒いニーハイの脚を片膝立てて、もう片方の脚は胡座をかくように大きく広げた。

ドレスの裾がフリルのアンダーと共に捲れ返り、その下のショーツがもう少しで見えそうになる。

その様に、魔族たちの中からゴクリと生唾を飲む音がいくつも響く。

「あたしみたいなお子様に欲情するとか、みんなどれだけ溜まってんのよ。引くわ～」

呆れたような蔑みの視線を注いで、ショーツが見えるか見えないかの際どさを保ちながら、何度も脚の位置を動かして煽りまくる。

「特にそこの豚っぽいの。オークだっけ？　もうなんか、股間がモッコリしてきてるんだけど。魔王に対してそれって、ちょっと不敬じゃないかしら？」

「ぐ……うううぅ……、お、おでは……その……うう……」

「ほら、その目。見られてるだけで、妊娠させられちゃいそう。イヤラシぃ」

勇猛果敢な兵士だが、繁殖力が高く魔族の中でも飛び抜けて性欲が強いことで

知られる。そんなオークの軍団が勃起(ぼっき)しているのに気付き、さらに腰を浮かせた際どいポーズを見せつけてピアリスがからかう。

「それでは全軍の指揮は私が代行するということで。その他諸々のことは、後ほど伺います」

股間を押さえて戸惑いの眼差しを漂わせるオークたちに代わって、セバスゴールが話を戻す。

「では、これにて魔王ピアリス陛下即位の儀と、謁見を終わらせていただきます。総員、退出せよ」

これ以上は何をされるかわかったものではない。即位の儀も謁見もろくに行っていないが、セバスゴールは感情の揺らがぬ声のままで終了を告げた。

「フフン♪」

全員を退出させた後、無表情の軍師が一礼して謁見の間を後にする。

閑散となった空間で、相変わらず玉座にしどけなく座りながら、ピアリスはたちの悪いイタズラを思いついたような、歪んだ笑みを満面に浮かべた。

父親である先王に溺愛され、自由奔放に育った姫君。

これまでも度が過ぎる振る舞いで周囲を混乱させていたが、先王の急逝に伴う即位で魔族全体の運命を小さな双肩（そうけん）に負うことになった。

父親と違って知恵の回る少女なので、さすがに責任を理解し、魔王らしい振る舞いをしてもらえると思ったのだが……。

「魔王を打ち倒し、人間どもは勢いに乗っていることだろう。しかしそこが狙い目だ。この峡谷（きょうこく）に本隊を装った陣を敷き、誘い込んでから背後から四大将軍による挟撃（きょうげき）を加えればいかに勇者とはいえひとたまりもないはずだ」

本来なら新魔王が主導しなくてはいけない軍議の場を、セバスゴールが取り仕切っていた。

「なになに、こんなところにみんなで集まって。エッチな相談？」

作戦もほぼ決まったところで、いきなりピアリスが会議場に入室してきた。一方的に猥談と決めつけて、からかうような笑い声を上げる。

「いえ、先王陛下の弔い合戦に関する軍議です。ピアリス陛下は、何か策がおありでしょうか？」

ついイラつきが抑えられず、険のある声になってしまった。
「やーん、怒らないでよセバスゴールぅ。冗談だってば、冗談。きゃはは。えーと、戦争の作戦よね？」
さらに神経を逆撫でする口調で笑いながら、セバスゴールの腕に抱きついて甘えるように身体を擦り寄せてくる。
二の腕に押しつけられる柔らかな双房の感触を心乱されないようにこらえるが、同席する魔王軍指揮官たちから、セバスゴールに嫉妬の眼差しがいっせいに注がれた。
「わ～、なにこれ、面倒臭いことするのね。人間なんてあたしたち魔族の足元にも及ばない貧弱な雑魚ばっかりなんでしょ？　だったらチマチマした戦い方しないで、正面からドカンと叩きつぶしなさいよ、その方がカッコいいし」
陣形を記した図を見ただけで作戦を理解したのは驚きだが、提案した策は父親譲りの脳筋極まりない力押しだった。
「しかし今回は確実な勝利を得なければ、人間どもの領内への進軍を許すことになり……」

戦力では圧倒できるはずなのに、これまでの無策な戦いのせいで魔王軍は次第に圧され、先王まで戦死するはめになったのだ。

「ふ～ん、魔王の命令が聞けないんだ？　セバスゴールって、あたしより偉いんだっけ？」

「い、いえ、そのようなことは……」

唇が触れそうなくらい顔を近づけて問い詰められ、甘く心地よい香りに理性を揺さぶられながら無表情を貫き答える。

「だったら従いなさい。お父様を殺した勇者はもちろん、人間どもを一匹残らず正面からカッコよく叩きつぶしなさい！」

命令と共に胸元に刻まれた魔王の紋章が赤く輝き、セバスゴールからこれ以上ピアリスへ進言しようとする気持ちを奪った。ただ本能的な忠誠心に心が染められて、恭しく頭を垂れてしまう。

『御意ッ！』

さらに脳筋揃いな各部隊の指揮官たちが威勢よく敬礼で答える。今回も免れそうにない敗北に、セバスゴールの胃がキリキリと痛んだ。

「貴様らぁ、腰が入ってないどおっ！　気合い入れでやらんかあっ！」
「ブヒッ！　ブヒッ！　ブヒィッ!!」
練兵場にオーク団長の怒号が響くと、整列し槍を振るう兵士たちのかけ声がひときわ高まる。
セバスゴールの作戦は魔王権限で却下され、勝算の薄い力押しの正面攻撃に変更されたが、脳筋揃いの軍団はむしろ気合いが入っている。それならば兵の底力を最大限に引き出し、少しでも人間に多くの被害をもたらすしかないだろう。
「うへ～、こんなところで訓練してるんだ。ただでさえ醜い豚面が、泥だらけでますます見苦しいわね」
戦いの流れは最初に斬り込むオーク軍団の勢いにかかっている。団長の傍らでセバスゴールが彼らに願いを託していると、なんの用があるのかピアリスがやってきた。皆いっせいに跪き臣下の礼をする。
魔王ならば、本来は構わず訓練を続けろと命じるところなのだが、ピアリスは酷薄（こくはく）なイタズラめいた笑みを浮かべてオークの軍団を見回す。

悪の組織から
平和を守る魔法少女
ミスティックメイデン
生意気なロリ女幹部がチンポで返り討ち!
愛の乙女・シトラス
正義の乙女・スカーレット
強く美しい三人の戦士たちに
今最大の危機が訪れていた…!
平穏の乙女・マリン
たった一人の
小さな少女
悪の女幹部
ジーニャによって…
ねぇもう終わり?
悪は許さないって
息巻いていたのに
この程度なの?
瞬殺でびっくり
しちゃった♥
ふたなり魔法少女、メスガキ小悪魔を成敗
漫画COMIC/水瀬揺光

三人で戦って
アタシ一人に負けて
悔しくな～い？

魔法少女って
ざこ♥ ざこ♥

ざあ～こ♥

くっ…
舐めないで…！

まだ…
戦えるっ！

私たちは
負けるわけには
いかないのっ！

うん！
うん！

そうだよね！

アタシも全然遊び
足りないんだよね

だから～お姉さんたちを
オモチャにしてあげる

ゼイイイ

ポゥ…

アタシの
性奴隷にな～れ♥

あんたたちの頭の中に性の知識をたくさん入れてあげた～♥

ぶるんっ

アッイ…

キュン

体中性欲に支配されるの♥

はぁ

はぁ

ププ…♥ もうえっちなことしか考えられない♥

もぞ

もぞ

ぐっ

ぐん

そしてそれを発散させるには…

クスクス

はぁん♪

あぁっ♪

んあああっ

ちんぽ♥

あはは♪

ずるんっ

そんな…っ
私たちおちんぽ生えてる…!?
見ててあげるからオナニーして♥
頭の中じゃもうどうすればいいかわかってるでしょ？
シコれ♥
ビクッ
ビクッ
ビクッ
あっあっああ男の子っていつもこれで私のこと…♥
なっなにこれっ初めて触ったけどこんなに気持ちいいの？
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
シュッ
シュッ
シュッ
シュッ
シコ
シコ
ビクッ
んっ…マリン…シトラス…！
はぁ
はぁ
ぷる
ぷる
だっ…だめだよ二人…ともっ！耳を貸しちゃ…！
あはははは♥ホントにシコってるウケるっっ♥
いひひひ…

スカーレットは
ヤらなくていいの？

スリ
スリ
ジュッ
ジュ
シコ
シコ

私は…
しな…いっ

こんなに我慢汁
出してすごい
辛(つら)そうだけど？

スチャ♡

ならアタシが
手コキしてあげる♥

クニ
クニュ

あう！
だ…だめぇ…

ん♡
クチュ
クチュ

ダメとか言って結局
期待しちゃってる
顔じゃん♥

かっこわるぅ♥

ズリュ
ズリズリ
クチュ♡ クチュ♡

アタシがいいって
言うまでそのまま
オナニーしなさいっ♥

ニュッ ニュッ

あはは♥
これが平和を守る魔法少女の姿ぁw
がに股で必死にちんぽしごいて
ほんとダッサぁい♥

だってこんな気持ちいいの知っちゃったら…♥
私イきます…せぇしでちゃっ…♥
私もイクわっイク♥イク♥
シコるしかないじゃない♥
はい手止めてっ
射精すの禁止い~♥

出したい♥出したい♥
我慢できないっ
精液上ってきて…出したいんです…手コキの続きを
ここまでヤらせて出せないなんて気分が晴れないわっ
今日はもう十分アタシが楽しんだから終わり～♥
次また会う時までオナ禁ね♥ ちんぽ触るのも禁止い～w
それじゃまた…
でるでるでる♥
でりゅ♥
えっ

びゅるびゅる止まらない♥
シトラスだけ出してずるい…
ちょっまっやめっ…
ちょっと何勝手に射精してんのよ！
アタシの命令が効かない!?
うわっきたなっ
こんなことしてただで済むと…
こいつらの性欲が勝ってるっていうの？
きゃっ
オナ禁なんて無理よ！
やっやめろ！放しなさいよ！
力が入らない…
こんなん…っ許さないから！
精液かかったところが疼くっ
もしかしてこの精液魔法少女の魔力が…

おっおい そこ手入れるな！

私たちをこんな淫乱にさせて♥ お仕置きしないとダメね♥

ひやっ

こいつ…アタシの性知識を入れたからってなんでこんな慣れてるの？

気持ちいいとこ的確に責めてくるぅ

手コキの続きしてください

貴女の手で射精させてください

私のも扱いて♥

よっわ～い♥
ワンコおじさんザコすぎ♥
※このあとめちゃくちゃわからせた。
俺をパーティから追放したメスガキ勇者をわからせ調教した件
小説／NOVEL 栗栖（くりす）ティナ
挿絵／ILLUSTRATION もりの

「無駄無駄！　そんな動きじゃ、私には傷ひとつつけられないよ!!」

辺境にある村の外れに、美少女の快活な声が響き渡る。

ちょうど真上でさんさんと照っている日差しを受け、眩(まぶ)しく輝いている金色(こんじき)の髪。

赤いリボンでふわりとボリュームあるツインテールにまとめた髪を優雅になびかせながら駆け、押し寄せてくる巨躯(きょく)の魔物に悠然と立ち向かっていく。

まだ成熟していない肢体を包み込むのは、ほとんど下着同然、胸元と下腹を覆い隠すのが精いっぱいのビキニアーマーとマント。

むっちりといかにも健康そうに見えるふとももまで惜しげもなく晒し、左脚にナイフの鞘をつけるため、あえて左右で長さを変えてある黒のタイツが、その眩しいほどの白さを際立たせている。

年相応以上の色香を感じさせる、とても戦えるようには見えない愛くるしい少女だが、その強さは圧倒的なものだ。

硬い鱗を持つドラゴンが。大木のような腕を振り回すオーガが。

普通ならば一匹に対して騎士団が総掛かりで挑まなければいけないような魔物

が、小柄な少女が剣を振るうたび、断末魔の叫びを上げる余裕もなく倒れていく。
「えーっ、この程度？　魔王城の近くにいる魔物だから、少しくらい手こずるかもって警戒してたのにー！　よっわよわじゃんっ♪」
かすり傷ひとつ負うこともなく魔物の群れを打ち倒した少女は、物言わぬ屍となった魔物たちをつまらなそうに見下ろした後、笑顔を取り繕って振り返った。
「おお、勇者さま、あ、ありがとうございます」
「これで村は救われました！」
物陰から固唾を呑んで戦いを見守っていた村人たちが、そんな賞賛の声とともに少女のもとへ集まってくる。
「ふふっ、気にしないでください。たまたま通りかかっただけですし♪　困ってる人を助けるのも、勇者の仕事だもんっ！」
そう愛くるしく小首を傾(かし)げて微笑む少女を、村人たちは『頼もしい勇者さま』と拝むように両手の指を絡めながら、思いつく限りの言葉で賞賛し続けていた。
――ただひとり、少し離れた場所から見守る男を除いて。

（やれやれ、相変わらず猫かぶりが上手な勇者さまだな）

心の中でうんざりと呟いた男の名はシロ。

少し前までは王都の冒険者ギルドに所属し、経験豊富な中堅どころの魔法使いとして名を知られていた人物だ。

彼が今、長期で請け負っている任務は、この美しく強い少女――世界を支配しようと目論む魔王に対抗できる力を持つ勇者、エステラの付き人役。

一時的に力を高めたり、逆に相手の力を弱めたり。

そういったいわゆる『補助魔法』に特化した才能を持つシロにとって、誰かのサポートを務めるというのは慣れた仕事だった。

地道に冒険者としてキャリアを積み上げてきていた彼は、魔王討伐に赴く勇者の付き人を探しているという話を耳にして、目の前に降って湧いた成功へのチャンスだとすぐさま飛びついたのだ。

（それが、まさか……）

シロが誰にも気づかれないように舌打ちをした直後、まだ賞賛の言葉を投げかけ続けている村人たちを片手で制したエステラが呼びかけてくる。

「おじさん、いくよ！」
「……えっ？　出発？」
「そうだよ。魔王城はこの先の森を抜けたところにあるし、このまま一気に突っ走っちゃうからっ‼　じゃあ、みなさん、私が魔王を倒してくるの、楽しみに待ってて」
驚くシロに構うことなく、エステラは村人たちへそう勇ましく宣言すると、前方に見える薄暗い森へと突き進んでいく。
そこは『魔の森』と称される、魔物たちがこの世界に生まれ出でる場所だ。
「い、いや、魔の森に乗り込む前に、この村で最後の準備するって……ああ、クソ！　わかった、わかりましたよ‼」
小声で呟きながら、シロは否応なしに重い荷物を背負って駆け出す。
もう日も高い時間だし、今から森――しかもこの世界でもっとも危険な魔物の拠点に突入するなど、正気の沙汰ではない。
だが、それを口に出して制しても無駄であることを、シロはこの半年に及ぶ勇者エステラとの旅で嫌と言うほど理解させられていた。

村人に対して、あんな風に愛想よく振る舞う愛くるしい少女勇者。
だが、そんな彼女の本性は――。

「ワンコおじさん遅ーい！　さっさと歩いてよねっ」
「はぁはぁ、無茶言わないでくださいよ、エステラさま……はぁはぁっ」
足場の悪い森の中。そこを跳ねる鹿のように軽々と突き進んでいくエステラを、シロは見失わないようにどうにか追いかけ続けていた。
元々の身体能力に差があるのはもちろん、エステラが持っているのは身につけている自分の装備くらいのもの。シロは旅に必要な道具類をすべて持たされているのだ。
身体強化の魔法を自分にかけてどうにかしているが、それでも同じペースで歩くのはとても厳しいものだった。
「本当にとことんグズだよねぇ、おじさんってば。戦闘でもまーったく役に立たないし！　それでいて荷物運びの仕事も満足にできないとかぁ、ざこすぎて呆れちゃ～う！　犬みたいな名前のワンコおじさん。まだ犬のほうが可愛い分、役に

立つよね。あははは っ♪」
「くぅっ……うぅ、申し訳……ありません」
健康的な桜色の唇を意地悪に吊り上げて笑うエステラへ、シロは湧き上がる悔しさを噛み殺しつつ、軽く頭を下げる。
先ほど強靭（きょうじん）な魔物たちを軽く一掃していたことからわかるように、勇者エステラの実力は常識を超えたものだ。
シロが得意とする補助の魔法が必要になるほどの相手とは、この魔王城間近のところまで旅をしてくる中でも出会ったことがない。
手傷を負うことすら一度もなく、荷物持ちや旅の雑事を請け負う以外、まともに役立てていないことは事実だ。
「んー、やっぱり私に付き人なんていらないよね。今からでも帰ったら～？　もう荷物もそんなにいらないしっ、私ひとりなら、日暮れ前に魔王の城へつけそうだもん♪」
「そ、それは！　あの……どうかお許しをっ!!　勇者さまの旅路に、最後までつきそう栄誉を私にお与えください……どうかっ……どうかっ！」

にやつきながらわざとらしく空を見上げて思案するエステラへ、シロは額を膝にこすりつけるように深く頭を下げて懇願する。

そんな悲愴感すら漂うシロを、エステラは冷たく見下ろして首を傾げる。

「ええ、どうしてそんなについてきたがるの？　あははっ、わかってるよ。おじさん、私に欲情してぇ、目が離せなくなっちゃってるんだもんねぇー♪」

「なっ……そ、そんなことは……」

慌てて弁明しようと顔を上げたシロの視線を煽るように、エステラはまだ隆起が乏しい胸元を隠すビキニブラを摘まみ上げていた。

赤い胸当ての端から、わずかにふくらんだいかにも柔らかそうな乳肌が見え隠れしている。

「うっ……」

「あーっ、ほら、また私の胸見てる！　うわぁ、こんな年下の女の子の胸、そんな血走った目で必死に見てるとか、マジでキモ～い！　筋金入りの変質者だね、おじさんって」

つい視線を向けてしまったシロを、エステラは大げさにはやし立ててきた。

「い、いや、これは、その……っ」
シロは必死に目を伏せ、言い訳の言葉を探す。
（ふざけるな！　お前と旅を始めて半年……娼館へ寄るどころか、自分で慰めるような暇もないくらい無茶働きさせられているんだぞ、俺は!!　その上、あり得ないくらいエロい鎧姿で、人を挑発するような真似ばっかりしやがって……）
まだ未成熟とはいえ、容姿は一国の姫君にすら負けないほど愛らしい少女勇者の扇情的（せんじょうてき）な姿は、欲望が限界を超えて溜まりきった男に耐えがたいもの。
目線が吸い寄せられ、股間が熱くたぎってしまうのは自然の摂理だ。
「っていうか、後を追いかけてきてるときも、ずっとお尻に視線感じてたんだけどぉ？　うりうり～♪」
調子に乗ったエステラは、後ろを向いて前屈みになるや否や、赤い色のビキニショーツ型のアーマーに包まれた尻房を振り始めた。
胸よりは成長しており、まるで熟れ始めた桃のようなヒップの形がくっきりと浮かび上がって見え、シロは思わず生唾を飲んでしまう。
今すぐにでもそこへ齧りついてほしいと言わんばかりの露骨な挑発だが、それ

だけはできないとギリギリで我慢する。

自分よりはるかに年長の大人が、そんなふうに葛藤する姿が楽しいのだろう。

振り返り見たエステラが、愉快そうに大笑いし始めた。

「あはは、本当に必死すぎ！　その年まで奥さんも彼女もいない非モテのざこおじさんって、やっぱり気持ち悪い‼　女の子にすぐセクハラする変態役立たずおじさんが勇者の私のお供って、評判悪くなっちゃうし～。んー、やっぱり、ここでクビかな？」

「そ、そんな！　見てませんっ、本当に見ていませんし、勇者さまに劣情を抱くなんて、恐れ多い真似はいたしませんっ‼　私はあなたの旅に少しでもお役に立ちたい、その一心で……どうか最後までお供することをお許しくださいっ！」

もうただ頭を下げているだけでは許してもらえないと、シロは落ち葉や枯れ枝が散らばる地面に跪（ひざまず）き、深々と頭を下げて訴える。

「あはははっ！　本当に必死すぎっ‼　いくら私が勇者だからってぇ、大人がこんな年下の女の子相手に土下座とか、マジ面白い！　笑っちゃーう！」

そんなシロを間近で見下ろすエステラは、サディスティックな笑みを浮かべ、

いつまでも愉快そうに笑い続けていた。
（クソっ、クソっ！　外面だけよくて、ひと皮剥けば大人を舐め腐った、性悪のメスガキが……っ！　人が下手に出てれば調子に乗りやがって！）
地面に顔を伏せたまま、シロは燃え上がる怒りを腹の奥底に押し込んでいた。
魔王討伐をなし得る唯一の可能性である、勇者の付き人。
そんな大役を、中堅どころの冒険者でしかないシロが掴むことができた理由こそ、このエステラの生意気すぎる性格だ。
幼いころから天才としてもてはやされていた美少女勇者は、周囲の人間、特に自分より年上の男をとことん見下しており、からかって弄ぶことが最高のストレス発散という底意地悪い本性を隠し持っていた。
名のある冒険者の間ではエステラのその性格は密かに知られており、旅の同行を願い出るものは誰も現れなかったのだ。
結果、そこまで情報が広がっていない中堅どころに募集がかかり、何も知らないシロがそれに飛びついてしまうという結果となった。
「んーっ、どうしようかな？　魔王との対決前に、足手まといとかいらないし。

セクハラキモおじさんはここでポイッでもいいんだけどー。あははっ、哀れすぎて可哀想だし、もう少し荷物持ちで使ってあげてもいいかなー？　ほらほら、優しい勇者さまにお礼の言葉はないわけー？」

「うぐっ……あ、ありがとうございます」

シロは顔を上げることもなく、ひれ伏したまま絞り出すように感謝の言葉を述べる。

（我慢、我慢だ……魔王を倒した勇者のお供……その栄誉が手に入ると思えば……これくらいのこと、我慢できるだろう！）

シロは気が遠のくほどの屈辱と怒りを、その言葉でどうにか宥めた。

ただの荷物持ちとはいえ、勇者の旅に最後まで同行した冒険者ともなれば、その名声はかなりのものだと期待できる。

今までは中堅どころの冒険者として慎ましく生きていくだけだったが、一転、成功者として贅沢な暮らしを手に入れることができるだろう。

「あーあ、キモおじさんをいじめるのも飽きちゃったし、さっさといこっか。魔王は、ざっこざこなキモいワンコおじさんより、いじめ甲斐あるといいなぁ」

そう上機嫌に歩き出したエステラに続き、シロも力なく立ち上がる。
（セクハラおじさん扱いも、犬扱いも……あと少しの辛抱だ！　魔王、魔王さえ倒して旅を終わらせることができれば……）
先が見えない、不気味な森の奥。この世界でもっとも恐ろしい魔王の居城にたどり着くことが、待ち遠しくて仕方がない。
シロはもう少しで手が届く成功を夢見ながら、相変わらずこちらのペースなど気にすることなく進むエステラを必死に追いかけた――。

そんな地道なシロの忍耐と努力が完全に無に帰したのは、それから間もなくのことだった。
「ちょっとおじさん！　聖光石（せいこうせき）、どこやったのよっ!!」
「い、いや、俺に聞かれても……あれはエステラさまが綺麗だから自分で持ち歩きたいと言って……その……」
いつも小憎らしいくらい余裕の表情を浮かべているエステラが珍しく取り乱す前で、シロもまた、自らの血の気が引く音が聞こえそうなくらい狼狽（ろうばい）していた。

大人気御礼!
フタナリ変身ヒロイン
戦隊シリーズ第3弾!

ふふっ

ちゅっ

ぢゅるっ

ぢゅぷっ

ふっ

ふっ

あっ

あっ

順調順調

ちゅっ

ちゅっ

チンポもちゃんと

大きく育ってるし

ぢゅるっ

びくっ

びくっ

ぢゅるっ

…アレから
だいたい10時間

そろそろ
お目覚めの時間よ
…二人とも♥

……
ったく
けど
キモい見た目のくせに
ザコすぎだよねー♥
テンタクルスの連中
次から次へと湧いて
くれちゃって…
グチュッ
特務戦隊
カラフルフォース
Colorful Force
第3話 正義陥落!?
悪夢の触手化改造!!
漫画 COMIC 火愚夜

イエロー悪い癖です油断しないでください
ここはやつらの基地何が出てくるかわかりません
えーでもホントのことじゃん
私がこんなヤツらに負けたりしないってー
…まあいいですあまりこんなこと言ってる時間もないですしね
そーそー早くレッドを探さないとっ
なに？警告音…？
うん…でも敵は一掃したハズなのに…
上？

わっ

うわっ

イエロー!?

ソラちゃんっ

ナルホド…オマエラ…が

ヒーロー…か

ちぇっ…分断されちゃったかけど

キュルルル

こんなデカいだけのクソザコ

私一人で——

ギャキン

〝黄色の閃光〟
フルバースト
ナルホド
ソレがオマエのチカラか
アハハハッ
黒焦げだー♥
ア

は…？

ズボッ

!!

ひょいっ

わっ

安心シロ

殺スナと女王ニイワレタ

はなせっ

はなせっ

ダカラまだコロサナイ

フ…フンッ それじゃ人質ってことなのかしら

けどざーんねんっ 私たちはアンタらのいいなりになんて——

殺スナとイワレタが——

オマエらワレワレタクサン殺シた

ソノ分産んデモラオウ
!?
ビキ
ビキ
や…ウソ
ウソでしょ
やめ…
そんなの
ぐぐ
ぐぐ
入るワケ——

あぁあぁあぁウソッウソッ

ボコッ

ぅぅにゃぅぅにゃぅ

入ってる…ッ
入ってるぅぅッ

おぅ

おっ

おっほッ

な…んってこと
するのよぉ…私…
初めてなのに…ッ

！

グチュ

正義の味方にこんなことして
ただじゃすまさな――

グチュ

グチュ

ウルサイ口だ

ドンッ

くそっくそっ
くそおっ
カラフルフォースが
正義の味方が
イエローフォース
夏目ヒマワリがッ
こんな
ヤツにいいッ

スクールカースト
最下位に堕ちた
母娘肉便器！
煌翼天使
プリズン・オブ
サクリファイス
ユミエル
三話　淫獄の学園奴隷生活
小説／NOVEL 黒井弘騎
挿絵／ILLUSTRATION 白う～凪い

影魔王(えいまおう)ベルゼエクリプスに敗北し、影魔の眷属を産み付けられて、奴隷の証である『天使殺し』の淫紋を刻まれてしまった聖天使たち。

二人に待っていたのは、学園ヒエラルキー最下級「奴隷」としての学園生活。

それは、文字通りの淫獄だった。

「なー羽連(はむら)センセー。またそのデカパイで俺のチンコ相手してくれよ。溜まってるんだよ」

「なっ……ど、どうしてわたしがそんな……ああ、いやよっ……く、ふあ、あ、ああ……！」

早朝から登校してきた男子たちの相手をさせられる真理(まり)。朝勃(だ)ちしたペニスを豊満な肉体を使って処理させられ、強制パイズリで射乳させられて自らも屈服絶頂させられる。廊下で生徒とすれ違うたびに巨乳を揉まれ、喉の乾きを潤すために何度でも母乳を搾られてイカされた。

「おう悠美(ゆみ)ちゃん。そんなエロいブルマ姿でお尻揺すって誘って……もう我慢できねえよ。一発ヤらせろや」

「やぁ、そ、そんな……ふあぁっだめぇ、ま、また……おちんちん、いきなり…

…いいっっ！」

学生たちとともに過ごす授業時間は、悠美にとってすべてが淫獄だった。体育の時間にはブルマ姿に興奮した男子に輪姦され、生物学の授業では若い女体を検体として穴という穴の奥まで調べられた。休み時間とて安息は許されず、男子トイレに連れ込まれては「便器」として扱われて小便と精液を全身にぶちまけられる。昼食では、精液まみれのドッグフードを犬のポーズで食べることを強要された。

「なーセンセー、今日昼の弁当忘れちまってよぉ。牛乳飲ませてくれよ……へへ、腹減ってんだよ、いっぱい出してもらうぜ」

「そ、そんな……ああっダメよ、お、おっぱい搾られたら……ま、また出る……うぅぅっ！」

「トイレ掃除めんどくせーなぁ、自分でキレイにしろよな転校生便女。あ、その前に俺のチンコ掃除しろ、チンカス溜まってるからよ……へへ」

「うあぁぁ、は、はい……あむ、じゅる……ん、ふぁ……」

心も身体も、人間としての尊厳さえも蹂躙（じゅうりん）し尽くされる淫辱の日々。

だが悠美も真理も、決して生命を脅かされることはなかった。
影魔王の目的は、自らが作り上げた楽園の維持なのだ。そのために最下層の奴隷は必須の素材――敗北した変身ヒロイン母娘は、その格好の餌食なのだ。
（っく……こ、こんな。毎日、毎日……本当に、奴隷みたいに……ひ、ひどすぎるわ……！）
（な、なんとかしなきゃ……でも、でも……！）
影魔王の作り出した学園監獄は、外界から隔絶された一つの異界だ。空間も時間も捻じ曲げられた世界での奴隷の日々は、もう数週間にもなる。
その間、二人が抵抗を試みなかったわけではない。
悠美も真理も、これまで過酷な戦いを続けてきた勇士なのだ。どれほど絶望的な状況であっても、正義の変身ヒロインは決して逆転を諦めはしなかった。
だが――
「う、うあ……ああっ！　お腹が……卵が、また……あぁっ！」
「うあぁ、い、淫紋が疼いて……はううぅっ！　吸わないで……媚薬出しながらエナジー吸われて……んお、おおぉぉ～～！」

二人に刻まれた『天使殺し』の効果は絶大だった。
子宮に殖え付けられた卵は母体のエナジーを常に吸収し続けており、もはや二人は聖天使としての戦闘力を完全に奪われてしまっている。子宮奥深くに寄生した影魔の卵は取り出すこともできず――取り出そうと試みれば大量の媚薬を注がれながら力を吸われてイカされまくり、身の程を教え込まれて屈服させられてしまうのだ――休む間もなくエナジードレインの激悦に悶えさせられる日々。常時高濃度の媚薬を子宮に直接注がれて、休む間もない発情状態を強いられた肉体には、もはや影魔王に抗(あらが)うための力は残されていなかった。
「良かったわね悠美ちゃん、ママさん。人々の幸せのために尽くす……わたしたち天使の存在意義よね。ここならずっとそうして暮らせるのよ……うふふ。こんな幸せってないわよねぇ？」
最初から最下層民であった穢翼(あいよく)天使アザゼル――愛奈(あいな)もまた、彼女たちと同じように奴隷としての毎日を送っている。
だが壊れた天使である彼女にとっては、これこそが幸福なのだ。
そして愛奈は、その狂った救済を、悠美と真理にも分け与えようとしている。

そこにはあるのは掛け値なしの善意。それがゆえに、この少女は恐ろしかった。

「あ、ああ……榊さん。ダメだよ……こ、こんな……おかしいよ……」

「おかしくなんてないよ。悠美ちゃんだって気持ちいいでしょ？　こんなに乳首とクリちゃん勃起させちゃって……うふふ。約束通り、わたしとお揃いにしてあげるね」

悠美と真理が充てがわれた寮の一室は、淫ら極まる愛の巣と化していた。

二十四時間いつでも生徒や教師が訪れては、思うままに嬲り、犯し、弄んで捨てていく。利用者には「家畜小屋」「ヤリ部屋」などと呼ばれているが、実情はそれ以下だ。何もない部屋は男女の体液で常に汚れ、むせ返るような性匂に満ち満ちている。住んでいるだけでも惨めさで心をすり減らされるような監獄で、悠美はまた、雄獣どもだけではなく同性の愛奈にまで徹底的に責め抜かれ続けるのだ。

「ね、今日も変身してしようよ♪　そっちの方がヘンタイっぽくて感じちゃうでしょ……ほら、変身してればキツくしても大丈夫だし……ね？」

「そ、そんな……ああっ。えっちなことするために、へ、変身するなんて……」

愛奈は変身姿でのレズセックスを好んだ。背徳感に加え、身体能力の上昇も相まって、異常なプレイも許容されるからだ。

性行為のために変身するのは、自ら神聖な天使の姿を汚しているようで、生真面目な少女は罪悪感に震えてしまう。しかしユミエルに変身しなければ、アザゼルの狂愛を受け切ることはできないのだ。

「ふふ、羽を震わせながらイキまくって。やっぱり可愛いねユミエルちゃん♪ それじゃ今日は約束通りこのピアスをあげるね、ほら……いくよぉ？」

「ひ、い、いやっ……ひぎぃぃっ！　い、痛ぁ……ック、ひ、ひいぃぃぃ～～～～！」

執拗な愛撫でビンビンに勃起させられた乳首にピアスを刺され、包皮を剥かれたクリトリスに金属製のリングを嵌められた。その痛みさえもが快感で、ピアッシングされた夜は、ユミエルは朝まで延々とイキ続けてしまったほどだ。

「あはぁ、ステキ♪　痛みにまだ慣れてないみたいだから、変身中だけしか出てこないようにしておいてあげるね……そっちの方が天使同士、特別な友達の印になるしね♪　だから大切にしてよね……わたしと一緒で一生性奴隷天使のユミエ

ルちゃん♪」

「ひ、ああっ！　やめっ、ひ、引っ張らないで……はひぃッ、ックっひぃ……ンンッ！」

天使の局部を痛ましくも淫靡（いんび）に飾り立てる、奴隷の証であるピアス。絶え間なく与えられる刺激で、ユミエルの乳首と陰核（いんかく）は常時勃起状態だ。

変身時に付けられたピアスは変身中にしか実体を見せないものの、変身前でも局部の感度は何倍にも増加してしまった。男たちには遊び半分で肉豆を弄（いじ）られまくって開発され、今ではもう、服の上からなぞられるだけでも達するほどの弱点に調教されてしまっていた。

（こ、こんな……。わたしの身体……こんなえっちになって……も、もう……！）

こんな状態で、もう何日……いや何週間、もしかしたら一ヶ月以上も――朝も昼も夜も嬲られ続け、もはや日月の感覚さえ定かではない奴隷生活。

悠美も真理もたっぷりと時間をかけて嬲り抜かれ、徐々に徐々に心も身体も調教され、いつしかこの淫獄が日常になってしまっていたのだ――

※　※　※

「おう羽連先生。次の体育の時間……へへへ、わかってるよな？」
「悠美ちゃんの大好きな水泳の授業だよ～。一時間たっぷり……楽しませたげるからねぇ？」
『っく……は、はい……ぃ……』
その日の午後の授業は、複数クラス合同での体育だった。
学園に備えられた大型プールで行われる水泳の授業は、真理にとっても悠美にとっても、まさに淫獄と呼ぶ他なかった。
「うひょー、やっぱりスク水姿似合うね～悠美ちゃん。ロリ顔ロリボディでスク水なんて、マニアックでそそるよなぁ」
「あっ、そ、そんな……。いや、は、恥ずかしい……です……」
プールサイドに集まった何十人もの男子たちに、無遠慮な熱視線を注がれる。童顔を恥じらわせて腰を引く悠美だが、そんな初心（うぶ）な仕草は雄たちの欲情をいっそう煽り立てるだけだ。
年齢に比して未成熟な肢体に、ぴっちりとフィットした紺色のスクール水着。滑らかな生地で強調されたお腹のラインや小ぶりな胸の膨らみなど、幼さゆえの

フェティッシュな魅力がいっぱいだ。羞恥で紅潮した表情や、太ももにじっとりと浮かんだ汗の玉が、ケダモノたちの欲望をいっそうそそり立てる。これから行われる淫交への期待感に、男子たちは隠すこともなく海パンにテントを隆起させていた。

「羽連先生もさぁ……へへっ！　そんな格好で授業なんてありえねーだろ。まるっきり痴女だぜ！」

「うぅっ、く、くぅっ！　み、見ないで……これは……この格好は、あ、貴方たちが……あぁっ」

同じく男子たちに囲まれた真理は、屈辱と怒りに声を震わせていた。

だがどれだけ凄んでみせても、男子たちの悪罵は終わらない。その誰もが、下卑た嘲笑を女教師に向けている。

「ははは！　手で押さえてないとデカパイ溢(あふ)れちまうぜ～先生。ま、そのバカでかいウシチチがそんなサイズの合ってないスク水に収まるわけねーか！」

「娘のスク水着てるとか無理しすぎ！　歳考えろよなぁ～ババア！　ぎゃはははは！」

「く、くううぅ……うううぅ〜〜〜！」

年長者としての尊厳を容赦なく抉(えぐ)られ、屈辱に身悶える真理。だがそれだけでも、男たちの品評通り、収まりきっていない巨乳が卑猥(ひわい)に揺れてしまう。

真理が着せられているのは、まるでサイズの合っていない小さすぎる水着——悠美とお揃いのスクール水着なのだ。豊満極まるグラマラスボディが学生用の水着に収まるはずもなく、無理やりに詰め込まれた媚肉がムチムチと絞り出されてしまっている。胸生地など破れそうなほどで、食い込みまくった生地越しにカップラインや乳首の陰影までもが浮き出してしまっていた。きつく食い込んだ股布からは淫唇の陰りが覗き、Tバックさながらに捩(よじ)れた生地からはたわわな尻肉の殆(ほとん)どが露出してしまっている。

（こんな格好……いやっ、娘の……悠美の水着を着せられるなんて……こんなの、ありえないわ！）

「マ、ママ……」

あまりにも変態的すぎる趣向に、羞恥と背徳感に身悶える女教師。大勢の若者たちの前で、年若い娘と同じ格好をさせられているというだけでも屈辱的すぎる

メスガキエクソシストをわからSEX!

悪霊を弄ぶロリ聖職者に闇の鉄槌が迫る!

にゃははっ♡

ほらほらぁー

イったら十字架に閉じ込められちゃうよ?

我慢できないのぉ?

こんなちっちゃな子にちんちんいじめられて

悪霊になっても雑魚ちんぽのヘンタイとか

きもすぎぃー

こんな簡単なお仕事フツーに除霊するだけじゃつまんないんだから

せめて無様にイってあたしを楽しませてよ

そーれぐりぐりぃー☆

漫画 COMIC 美岳(みたか)

にひひっ
封印
完了っと
天才エクソシスト
シャーリーちゃんに
かかれば
こんなもんだけど
ちょっと
ソーローすぎなーい？
オ…オノレ…
コンナ
ガキニ…
さ――て
グッ……
ヴ……
キミが一番
でかそうだから
最後に
残しといたん
だよねー
ヤメ
ロオ…！
少しは
他のコと
違うところ
見せて
くれるかなー？

とっ…
う…
うわっ
もしかして
いじめられるの
期待してたとかぁ？
とびっきりの
ヘンタイだねっ！
ズルッ
ボッ
え…？
こんな
サイズ
あり得なく
ない…？
ふ…ふんっ
ほらほらぁー
ガ…
ガ
大きくても所詮
他の悪霊と
同じ
ここだけは
立派だけど
その反応
どーせ
ドーテー
なんでしょー？
ちょっと
いじめ甲斐が
あるだけよね
霊になってからも
ドーテーのまま
浄化されちゃうなんて
マジ
かわいそーw
ぷぷぷっ
……!!

ソウダ…
生キテイタ
間モ
アラユル女ニ
キモイト言ワレ
ナントシテデモ
セックススベク
現世ニ
留マッタノニ
コンナガキニ
邪魔サレルトハ…
ヌ
ガ
ア
ア
ボンナァ
!?
犯スウ!!

犯ス！
犯ス！
犯ス!!
にゃは…火事場の馬鹿力ってやつぅー？
セックスへの執念だけでこんな力出すとか
ほんとヘンタイっ…
ちょっ 触んないでよっ
うそっ…封じてた奴ら
オオッ
デカシタゾ同志ヨ！
コレハ僥倖！
全部抜け出しちゃった!?
急いでアレ直さないとっ…
キミ達みたいな雑魚は
大人しく閉じ込められてりゃいいの！

なっ こっ これは…
依頼主!? ばかっ! 今出てきたら…
一体何…
シメタッ!!
がっ!?
ゴゴオ
ムコオッ!?
ビクッ
ガッ!?
ウゴッ
くっ…
このっ!
ククッ
ビクン
グ…ギ…
サテハ 聞キ耳ヲ 立テテイタカ 馬鹿ナ 男ヨ
オカゲデ コウシテ 生身ノ 身体ヲ得ルコトガ デキル!
ビクッ
ぬるっ
うわぁ…
きもっ…

プフゥッ…
クソガキガ
言イタイ放題
言イヤガッテ…
マズハ
テメエヲ犯シテ
落トシ前ヲ
ツケサセナキャ
気ガ済マネエ
は…
はんっ
も…
もしかして
やばい?
イキがっちゃって
なんとか
あの十字架を…
女の子の扱いも知らない
ドーテーのくせに…
きゃあっ!?

ジャア
オ前ノ身体ニ
タップリト
教エテ
モラオウカ！

き…
気持ち悪っ…

こんな奴に
胸見られて

が
がっつきすぎぃー

あたしが魅力的なのは
分かるけどさぁー…

舐められる
なんてっ…！

ん…っ！

ンン～？
ナンダァ
今ノ声ハ？

ビクッ

……っっ！

ビクッ

うる…さいっ

そんなわけ
ないでしょっ

マサカモウ
感ジテヤガルノカ？

あたしが
こんなので…っ

ぬるぬる

ん

く……っ

ぬるっ

あんっ♡

ビクッ

な…なんでっ？
あ♡
舐められるの嫌なのにっ…！
ハハハハッ！イイ声デ鳴ク！
隨分トココガ弱イヨウダナ！
な……
なにその気になってんの？
はっ
こんなのただの演技だってば
これだからドーテーは…
はっ
ホホウソウカナラバモット…
あ…っ？
気持チヨクシテヤラネバナ!!
ちょっ!?
何考えてんのよ
こんな格好っ…！

え……？
こいつ
まさかっ…！
ギョギョギョ
流石ハ同志！
コレハ見事ナ
意趣返シダ！
ふ…ふんっ
経験が
ないからって
人の真似事？
こいつらみたいな
ヘンタイくらい…
大丈夫っ
あんなので
感じるなんて
あたしの
やってた
電気あんまをッ…!?
そんなので
あたしが——
おほおっ!!?

あ!?
あっ!?
あん♡
ビクッ
ビクッ
ビクッ
あ♡
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ぴいいっ♡
なっ 何これぇえ!?
あそこ じんじんして 声 止まらなっ…!
ヒューッ 我慢デキン!
や…あっ
俺達モ 混ザラセテ モラウゼ!
今 触られたらっ…
ギャハハハハッ ナンダソノ様ハ!!
股擦ラレテ感ジテル 変態エクソシストガ!
ヨク俺達ヲ 馬鹿ニ デキタモノダナ!
ちっ 違っ
あたし 変態じゃ

傍若無人な鬼姫を尻叩きで折檻――
犯して犯して犯しまくり、
牝を自覚するまで徹底的におしおき！

鬼姫 魑魅魍魎の罪と罰

小説／NOVEL 斐芝嘉和（いしばよしかず）
挿絵／ILLUSTRATION Lとらっぷ

都城南方三十里、深山幽谷の奥深くにある鬼の里――。

「急げ急げ急げッ！　ノロノロしてるとヤツに気づかれちまう、急げッ！」

配下の鬼たちをしきりに急かしているのは、牛頭の巨鬼。

久々に都城を襲撃し、大戦果を得た直後だ。

巨大な一枚岩の上で指揮を執る牛鬼の眼下、蟻のように列を成した配下の鬼たちが、それぞれの肩に金銀財宝が詰まった大きな箱を担ぎ、最近建てられたばかりの新しい『宝物庫』へ黙々と向かう。

「おい、早くしろ！　モタモタするな！」

目を血走らせ、口から唾を飛ばして声を荒らげている牛鬼の背に、

「どうしたのじゃ、牛鬼。泥ヶ岳の三鬼として恐れられているおぬしが、なぜそんなにも急いておるのじゃ？」

鈴の音のように愛らしい少女の声がかけられた。

が、腹の底から焦っている牛鬼は振り向くことなく、

「決まっているだろう、ヤツが来るからだ！」

吐き捨てるように答える。

「ほう？　ヤツとは？」
「何度も言わせるな。あのガキだよ！　テメェじゃなにもしないクセになにもかも分捕(ぶんど)っていく、とんでもねえクソガキだ！」
「なんと、そんな酷いことをするガキがいるのか……しかし、ならばなぜ、あちらの丈夫そうな蔵に入れぬ？　あんな掘っ立て小屋では心細かろう？」
　無邪気な問いかけに、ふん、と得意げに鼻を鳴らす牛鬼。
「それが狙いよ。あの吹けば飛ぶような掘っ立て小屋はただの入り口さ。本当の宝物庫はあの地下にある。あのクソガキは頭が悪いから、お宝は蔵の中にあるもんだと思い込んでいる。掘っ立て小屋には目もくれないだろうよ」
「なるほど、それは妙案！　牛鬼は賢いのう！」
「いやぁ、それほどでも……うっ⁉」
　幼気(いたいけ)な声に褒められてまんざらでもない顔になった牛鬼は、己の傍に立つ小さな少女にふと目を向け、たちまち顔色を失って棒立ちになった。
　それを見上げ、
「ん？　どうしたのじゃ、牛鬼？」

愛らしく小首を傾げる少女。

小柄で細身の、柔らかな頬と長く艶やかな漆黒の髪が美しい、珠のような美少女だ。肌は透き通りそうなくらい白く、瑞々しく、あどけなく微笑んだ頬が淡い桜色に輝いている。

しかし、その風体は異様。

黒地に花柄の豪奢な打掛をぞんざいに纏い、細い肩を剥き出しにして艶めかしい鎖骨を見せびらかしている様子は、まるで臈長けた遊女のよう。大きくはだけられた胸元に女性らしい膨らみは見当たらないが、愛らしい乳首を隠すためか、サラシがきっちり巻かれている。

打掛の裾は短く詰められ、その下に褌の前垂れがわずかに覗く。

そこから伸びる左右の脚はスラリと長く、眩いほどに白い。まだ肉づきの薄い太腿と若鮎のように優美な脛が、しなやかで健やかな曲線を描いている。

鄙には稀な美少女——だが、その額には小さな角が二本。濡れたように輝く前髪の下、二重瞼の円らな瞳は熾火のように紅い。

そしてその、小さな小さな背のうしろには、己の身体より遥かに大きくて見る

からに重そうな、槌。
「ち、魑迦陀、様……」
真っ青になって硬直していた牛鬼が、愛らしい少女から一歩、二歩と後退りつつ、掠れた声を絞り出す。
この、遊女のような格好をした小柄な美少女こそが、泥ヶ岳の三鬼を統べる鬼の姫・土雲魑迦陀だ。熊より大きな牛鬼でさえも頭が上がらず、
「いつからそこに……いや、なぜここに？」
青くなったり赤くなったりしながらおずおずと訊く。
「豚鬼から聞いたのじゃ。牛鬼がまたお宝を得て来たとな」
にぱっ、と無邪気に微笑んでから、おおそうじゃ、と懐を探る魑迦陀。
「この間おぬしからもらった宝物じゃが、要らなくなったから返す。ほれ」
小さな手で取り出した金属製の環を、牛鬼の足元にポイッと投げ出す。
大きさからして頭に被る冠の類のようだが、そこかしこに埋められているはずの宝石はない。代わりに、大小の窪みがいくつもいくつも穿たれている。
つまり、宝冠から宝石を取り除いた残骸だ。

「こ、これは……」
元宝物の無惨な残骸に言葉を失う牛鬼と、
「だからもう、それは要らぬ。返す」
ニコニコと、どこまでも純真そうな魑迦陀。
が、すぐに真顔になり、んん、と首を捻る。
「こういう場合は、返すとは言わぬのか？　元は牛鬼の物であっても、一度はわらわの物になったのじゃからな。姫が姫の物を臣下に下げ渡すのじゃから、やる、と言うべきであったか……どうじゃろうのう、牛鬼？」
「ぐ……ぬぅぅ……ッ！」
ギリギリと歯軋りした牛鬼のコメカミに――いや、コメカミだけでなく肩や背や腕などにも、太い太い血管が浮き上がる。普通の鬼より一回り以上大きな体躯全体から、質量を感じられるほど濃密な怒気がとめどなく溢れ出す。
「確かに魑迦陀様は、我ら鬼族の長……しかし、いくら姫でも、やっていいことと悪いことがありますぞっ！」
ズンッ！

愛用の金棒で地を突き、分厚く盛り上がった大胸筋を見せつけるように雄々しく反り返る牛鬼。人間であれば恐怖のあまり絶命してしまっただろうが、鬼の姫である魑迦陀は微塵も動じない。そればかりか、いっそう楽しげに微笑んで、

「さて、なんのことじゃ？」

サラシを巻かれたペタンコな胸を挑発的に反り返らせる。

「魑迦陀様は我らが姫であられますから、上納品を請求されるのはよい。よいがしかし、なにもかも奪っていくのはいかがなものか！」

「だから、要らない物は返したであろう」

「返すッ⁉　あの煌びやかだった宝冠を、こんなガラクタにしておいて、返すですとっ⁉　返すというならここに嵌っていた宝石も、すべて揃えてキッチリ返していただきたいッ！」

「それはできぬ。いま、箱庭造りに凝っておっての。百畳敷きの、それはそれは大きな箱庭じゃ！　ただ単に大きいだけではないぞ。宮殿には象牙の柱を並べ建て、金の瓦を葺く。扉や窓には七色の宝玉を飾りつけ、白沙の庭には金剛石を敷き詰める。木々はやはり紅珊瑚じゃな。池は蒼玉にしようか翠玉にしようか迷っ

ておるのじゃが、牛鬼はどちらがよいと思う？」
「知りませぬッ！」
大きな鼻をいっそう大きく膨らませ、憤怒の息を吐く牛鬼。
「魑迦陀様が欲しい物は、魑迦陀様御自身で揃えられませ！　これらの宝物は、私が、私の力で奪い盗ってきた物です！　魑迦陀様も、欲しい物があるなら自らの力で奪い盗りなされ！」
力こそ正義というのが、鬼の法。だから牛鬼の言葉はひとつも間違ってはいないのだが、魑迦陀は我が意を得たりとばかりにニンマリ笑う。
「よく言った牛鬼！　それでこそ我が家来じゃ！」
「え……？」
「わらわは、そなたが集めた宝物が欲しい！　欲しくて欲しくてたまらぬ！　じゃから、力尽くで奪い盗る！」
「あ、いや、そうではなく……うわっ⁉」
急に蒼褪め、慌てて横っ飛びに転げる牛鬼。
その、最前まで巨鬼が立っていた場所に――。

ドォンッ！

力一杯振り下ろされる、魑迦陀の槌。

途端、足元の巨岩に深い深い亀裂が走り、鬼の里全体が激しく揺れる。同時に空が俄に掻き曇り、龍の咆吼のような雷鳴が深山幽谷を震わせる。

使用者の思い通りに柄が伸び縮みして、一振りすれば天が裂けて地が割れる、鬼神の宝物・乾坤槌だ。並みの鬼より一回り以上身体が大きな牛鬼でも、天地の理を凌駕した神器で殴られたらひとたまりもない。

「わ、我らの物を奪うのではなく、人から奪いなされッ！」

「なぜじゃ？　おぬしは先ほど、欲しい物は力尽くで奪えと申したではないか」

ぞんざいに羽織った打掛の長い袂を翻しつつ、巨大な槌を担いで風のように走る小柄な鬼姫。白く細い脚がしなやかに躍動するたび短く詰めた打掛の裾がはためいて、プリッと丸い小振りな美尻が露わになるが、頭の中身が幼いからかまったく気にしていない。熾火のように紅い瞳を爛々と燃やし、あどけなく微笑んだ口元に愛らしい牙を覗かせて、

「そら、そら、そらっ！　わらわと打ち合え、牛鬼ッ！　わらわのことをバカだ

アホだクソガキだと好き放題に罵ったツケ、しっかり払ってもらうぞ！」

逃げ惑う巨鬼の前へ前へと俊敏に回り込む。

鬼はただの生き物ではなく、零落（おちぶ）れた神だ。

ゆえに、その力の大小は外見からは測れない。

鬼族の王の血筋である魑迦陀（ちかた）は姿形こそ純真無垢な童女だが、その小さな体躯に秘められた鬼力は里のだれよりも強い。それだけでも脅威なのに、キャッキャッと無邪気にはしゃぎながら天を裂き地を割る乾坤槌を手頃な玩具として振り回しているのだから、もはやだれにも止められない。

「ま、参ったっ！　参りましたッ！　すべての宝物を差し上げますから、どうか、どうか御勘弁を……ッ！」

「なんじゃ、つまらんのぅ。気晴らしに、蔵や屋敷を打ち壊していくか」

「ッ⁉　そんな、御無体な……」

いっそう蒼褪めた牛鬼は慌てて魑迦陀（ちかた）の脚に縋（すが）ろうとしたが、そのときにはもう幼気な鬼姫は風を巻いて駆け去っていて――十棟並んだ蔵が端から順に、丁寧に丁寧に打ち壊され始めた。

＊　＊　＊

その夜――。

「もう我慢ならんッ！　いくら鬼でも理不尽すぎるッ！」

傍若無人な鬼姫の気晴らしとして屋敷を徹底的に打ち壊された牛鬼は、三鬼のひとりである馬鬼の屋敷に転がり込み、ヤケ酒を呷っていた。

「我らの宝物を取り上げるだけなら良い！　いや、決して良くはないが、しかし、一応理屈が通っておるからなんとか我慢できる。だが、蔵や屋敷を打ち壊すとなれば話は別だ！　しかも理由が『つまらん』では、腹の虫が治まらん！」

鼻息荒く吼えながら、杯を叩き割る牛鬼。

それを横目にジロリと睨み、馬頭の鬼が静かに諌める。

「とはいえ、魑迦陀様の鬼力は頭抜けておる。我ら三鬼ばかりでなく、里の鬼が束になったとしても、絶対に勝てないぞ」

「乾坤槌だ。乾坤槌さえどうにかできれば、あとは数の暴力で……」

――あははっ♡ 私に口答えするなんてほんときもーい♡
ブウッ!
ピキッ
妹弟子のくせにナマイキで…
『氷結魔法』!
マチよ… 兄弟子のビリーに魔法をかけるとは何事か…
下手したら死んでたぞ
ツーン
だってぇ むしゃくしゃしてたんだもん
マチマチな関係
漫画 COMIC 吸斬
は~い すいませぇん
ハァ~~…
今回は大目に見るがまた同じことをしたら――

破門

にいたす

嘘っ…
少しからかっただけ
じゃないですか！

それを控えよと
言っておるのだ

フッ・・・・

3ヶ月後
ここで試験を行う
ではさらば

ドサッ

しかも今度は破門よ！
あんたがグズなせいで！

ドサ

あんたのせいでまた
怒られたじゃない！

し召喚魔法は不得意だけど薬草調合の時は僕も頑張ってただろ…

そっちなら得意だし…

ニマ

ニマ

ニマ

…私に口答えするんだぁ

お荷物のキモ男のクセに――

おしおきが必要ね♡

『氷結魔法』

ガチン

シュパパッ

うふふ♡ 凍って動けないでしょ～

ぷるぷるん

私のおまんこ見れるって期待しちゃった？
ポフッ
!!
ぴら♡
私の脱ぎたてパンツで目隠しされちゃいまーす
ストレス発散はやっぱこれよね
ぐにゃ
ぐにゃ
ビクッ
ビクッ
痛っ！
大人からかうの楽しいい～♡
あれ？踏んづけちゃった？粗チンだから気づかなかったよぉ
ぐりぐりっ

小さすぎて
また
見失っちゃった
あぁここに
あったのね
あっ！
やめてくれっ
ぴくぴくしてて
キモ～イ♡
もしかしてもう
出ちゃいそうなの？
そ、そんな
わけないっ

ほんとぉ？雑魚ちんぽは出したがっているよ？
フッ
フー
フー
ぐりっ
ぐりっ
うそつきにはも～っとおしおきしないとね♡
ざーこ♡ざーこ♡
くそっ…
やめっ
クネクネ
ぐりっ
ぐりゅ
頭もちんぽも雑魚なのかな？
プル
プル
ダメだっ…限界だ出るっ
出るっ
またうそついた♡
ぬっちゃあ…
嫌なら先っぽこんなにぬるぬるしないもん

くすくす
あはは出た出た！
ビクッビクッ
ビクッビクッ
ビクッビクッ
くっさぁい♡
こんなのため込んで外出歩いてるなんて信じられない
どうしようもないヘンタイね
ハァ。。

ふう…スッキリした♡
じゃあ明日までにはここを出て行ってね
じゃないと私破門になっちゃうから
ひょいっ
もし出ていく気がないなら
お師匠にあんたに襲われたーってチクっちゃうから
くるくるっ
じゃ~ね~♡
あのメスガキ…舐めやがってっ…
ぐしっ…

翌日
ガチャ
何？ 呼び出して出ていく準備は出来たの？
あぁ… 最後に挨拶をとお思ってね
スタスタ
ふう～ん あんたがいなくなると寂しくなっちゃうね
お別れのチューしてあげよっか♡
ゴ
きゃあっ!?
ブルブル

天才メスガキの地位を
小便娘にひっくり返す!
イキまくり
堕ちまくりの
調教姦!
天才魔導少女の
敗北絶頂
高慢メスガキへ"分からせ魔法"
小説 NOVEL／遠野渚
挿絵 ILLUSTRATION／ゴールデン

「まったく、こんな簡単な術式さえも維持できないなんて、本当に大人なの？この程度のレベルで王立大学の首席だなんて、この国の将来が心配よ！」

高圧的な態度で言い放ってくるのは、成長期を迎えたばかりという年頃の、大人と呼ぶにはまだまだ早い少女。

小柄で華奢（きゃしゃ）な身体を薄手のローブに包み、うっすらとした桃色の髪の毛は長く伸ばしてツインテールに結び上げている。

この少女の名前を、ハルという。

ときは昼下がり。

場所は魔術を研究するための研究所。

魔術の研究は、この国……トリキア王国の発展のために最重要事項として、惜しみなく血税が注ぎ込まれている。

ハルは、個人的な研究所を任せられている天才少女だ。

そんなハルは足を組んで椅子に座り、研究所にいるたった一人の青年に向かってさらに言い放つのだった。

「なにボーッと突っ立ってるのよ、キグナス。失敗したなら謝る！　子供でさえ

も知ってることでしょう？」
キグナスと呼ばれた青年は、ハルよりも一回りほど年上。それでもハルの部下ということもあって頭が上がらない日々を過ごしていた。
だが失敗したのはキグナスに全責任があるわけではない。ハルが要求する術式のレベルが、一人で展開するには高すぎたのだ。
それでも部下であるキグナスには口答えすることさえも許されなかった。
「まことに申し訳ありませんでした。以後気をつけます」
「はぁ？　謝罪の言葉に誠意がこもってないんですけど？」
ハルは眉をしかめると怒り出す。
ハルがこうやってさらなる謝罪を要求してきたときにキグナスがやることは、たった一つだった。
「このたびは私の力不足のせいでハル様の研究の足を引っ張ってしまい、まことに申し訳ありませんでした」
キグナスは不本意ながらも膝を床につくと、両手を揃えて土下座する。
実に身体に馴染んだ動作だから、手慣れたものだが……。

年下で、いけ好かないこの小娘に土下座させられるのは内心で面白く思っているはずがない。

いい年した大人であるキグナスがハルのような少女に頭を下げるのは、なにも知らないものが見れば滑稽な光景だ。

だがそれほどまでにハルの才能は、この魔法大国トリキアにおいて抜きん出ているのだ。

ハルは、自他共に認める天才少女だ。

どれくらい凄いのかというと、このトリキア王国の文化的生活と軍事の中枢である宮廷魔術師の大人たちを差し置いて要職を任せられ、この個人的な研究所を与えられているほどに。

武勇伝にもこと欠かず、モンスターの大群が押しよせてきた防衛戦では大型の攻撃魔法を炸裂させて一瞬にして敵を全滅させただとか、凶悪なドラゴンを一撃で粉砕したとか……まあ、規格外の少女ということだ。

トリキアの至宝だとか、ドラゴンキラーだとか、様々な二つ名を持っているし、たしかこの前も新しい名前が追加されたらしいけどキグナスはまったく興味がな

いので覚えてはいなかった。
国民からも、王族からも信頼が厚いハルだったがキグナスと二人きりのときだけ様子が変わる。
傲岸不遜・無礼千万な態度で唯一の研究所員であるキグナスに当たり散らし、しかもあごで使ってくる。
そうかと思えば（キグナス以外の）人前ではとても人当たりが良く、礼儀も信じられないくらいにわきまえている。
そんなハル様が、キグナスをやや吊り気味の碧眼（へきがん）で睨みつけていた。
ついでと言わんばかりに、土下座しているキグナスの頭をグリグリと踏みつけてくる。ハルが身長をごまかすために履いている厚底靴が痛い。
「まったく、王立大学首席なんだから、もっと自覚を持って仕事に臨みなさいよねっ。この国の将来はあたしたちの研究にかかってるんだから」
「はい。肝に銘じておきます」
「返事に気持ちがこもってないっ」
「大変申し訳ありませんでした。以後気をつけます」

「以後って、あんた……何年後よ。この研究所に残ってるのはあんただけなんだから、しっかりしてもらわないと困るの。わかる？」

「はい。理解しているつもりです」

キグナスは床に額（ひたい）を擦りつけながら応える。

ここでハルの機嫌を損ねたが最後、この研究所から辺境に飛ばされる。そうでなくても、王族からの信頼も厚いハルを怒らせるとあとが怖いのだ。

王国の審問委員会にかけられでもしたら、将来的な査定に響いて出世の道が閉ざされることになる。

ここは謝罪の一手だ。

「ふんっ、謝ることばかり上手くなってないで、しっかり勉強もしなさいよね」

トドメと言わんばかりに足蹴りすると、ハルは気が済んでくれたのだろう。

「いつまで床を舐めてるのよ。あたしの気が済んだらすぐ土下座をやめる！　あたしが無理やりさせてるみたいだし！」

（そんな無茶な）

内心では思うけど、間違っても口に出してはいけない。

キグナスは土下座をやめて立ち上がる。
だけどまだ気を抜いてはいけない。ここですぐに謝罪ポーズを解こうものなら、すぐに土下座へと逆戻りなのだ。いままで何回もさせられてきたのだから身に染みてわかっている。
「今後このようなことがないように、これからも日々精進を欠かさず、ハル様の足を引っ張らないように努力します」
立ち上がってから再度、頭を下げての謝罪。
ハルは嫌みの混じった吐息を漏らしてみせる。ちょっとは気が済んだのか、それともまだまだ落ち着いていないのか。
しかし――。
こうして頭を下げていると、キグナスの視線はどうしてもある一点へと吸い寄せられてしまう。
その一点とは。
(前々から思ってたけど、見えてるんだよな……。でも指摘したら、余計に面倒臭いことになりそうだからやめとくけど)

キグナスの視線の先にあるもの……それはハルの胸元だった。
椅子にふんぞり返っているハルに頭を下げると、どうしてもチラリチラリと見えてしまうのだ。
ハルは胸元が広がっているローブを好んで着るので、キグナスは謝るときにいつもハルの胸の膨らみを拝むことになっていたのだった。
ハルの胸の膨らみ……というには、ややなだらかな双丘（そうきゅう）。しかし将来の成長を感じさせる、みずみずしく張りのあるおっぱいだ。
面倒なことに巻き込まれるのはごめんだと思いながらも頭を下げていると、
「あんた、どこ見てんのよ」
ハルは眉をしかめて言うのだった。
まさか胸を見ているのがバレたとでもいうのだろうか？　ほんの少しのチラ見だったし、なるべく見ないようにしていたのだが。
「べ、別にどこも見ていませんが」
「うそ。この変態が。また土下座したいのかしら」
「うっ」

言葉に詰まってしまうキグナス。だが黙っていては土下座、しかし正直に言ってしまうともっとよろしくない状況になりそうだ。
（マズい、このままでは査定がっ。それ以前に辺境に飛ばされるぞ、俺……！）
このままでは他の同期たちと同じく、ハルの島流しをくらうことになる。だが言うべき言葉も見つからない。
だが黙っていても状況は好転してくれるはずもなく、
「ほんと最悪。まさか部下に性的な目で見られてたなんてねー。これ、審問委員会に報告しといたほうがいいかしら」
「ま、待ってくれ……っ。いや、待って下さい。なるべく見ないようにはしてたんです」
「ふーん。見てたのは認めるんだ」
「うぐっ。い、いや、見てなんか……っ」
やばい。まさかの誘導尋問。
だがここでそう簡単に認めることはできない。それでも言葉を探して黙り込んでいると、ハルは足を組み直して言い放つのだった。

「……まぁ、たしかに気の迷いってこともあるかも。それを確かめる新しい術式があるから、確かめてみようかしら」

「あ、新しい術式？」

「いまにあんたがどこを見てたのか白日の下に晒してやるんだから。しっかりとその目に焼き付けておきなさいよ！」

ハルは椅子から立ち上がると、くるりとローブの裾を回してみせる。そして手近に立てかけてあった樫の杖でカツンと地面を叩く。

ハルの足元にピンクの魔法陣が展開され、キグナスは思わず引いてしまう。

「えっ、いまここでですか⁉」

先日、ハルの魔法で一匹のドラゴンが灰になったばかりだ。もしも、そんな魔法をここで使われたりなんかしたら……！

「大丈夫。失敗なんかしないわよ。あ、でももしもなにかあったら、あんたの骨はちゃんと拾ってあげるから感謝しなさい♪」

「ひっ、ひええ！」

しかしここで逃げたらハルの機嫌を損ねて辺境待ったなしだ。

それにもしもハルの新しい魔法によって、キグナスが胸を見ていなかったことになれば、無罪放免ということにもなる。……見てたけど。

そんなキグナスの内心など知らず、ハルは魔法の詠唱を始めるのだった。

「体内を流れる生命の源流たるマナよ、我の言葉に耳を傾けたまえ。我が解き明かすは、万物の奔流（ほんりゅう）」

ハルの魔術の詠唱に次々と足元の魔法陣の数式が結合されていき――、

「クワッド・ガロン！」

それは聞いたことがない魔法だった。ハルが開発した新しい魔法なのだから当然なことだけど。それにしても、どんな効力が……？

もしかしたら失敗して爆発したり、攻撃魔法が飛んでくるかもしれないと思って身構えていたキグナスは、こわばっていた身体から少しずつ力を抜いていく。

「……なにも起きない……？　失敗、ですか？」

「ふふ、そんなにがっつかないの。効果が出るまでもうちょっとかかるの」

ハルの言葉に待つこと三秒ほど。

それは突然、キグナスの目の前に滲（にじ）み出してきた。

（……ん？　これは……汗？）

キグナスは目を細めて凝視してしまう。

なにしろローブ越しに、ハルの薄い胸の膨らみの頂（いただ）きから、じんわりとした染みが滲み出してきたのだ。

それに心なしか乳首がツンと勃起（ぼっき）しているようにも……？

「あたしが開発した魔法！　それは身体の生命力の流れをコントロールして、母乳を出せるようになる優れものなの！　どう、凄いでしょ」

「むぅ、たしかに凄いですが……っ」

なぜ、そんな魔法を？　ハルの考えがわからない。それでも性的にしか思えないその現象は、キグナスの男心をささやかながらくすぐってきた。

「ふふふ。そんなに凝視して、やっぱり上司に興奮してたのね」

「……は⁉　いや、そんなに凝視してはっ」

そういうことか、キグナスは内心で理解する。ハルはわざと自らに性的な現象を起こして、キグナスの視線を誘導しているのだ。

とっさに目を逸らすけれど、逸らすということはそれだけキグナスの視線がじ

んわりと滲み出してきている液体に釘付けになっていたということだ。
「そんなに見たい？　ねぇ、見たいんでしょ」
「み、見たくなんかは……っ」
「あっそ。それじゃいいわ」
ハルの言葉尻に、やや不機嫌そうな色が混じる。やばい。ここで機嫌を損ねたら、辺境がすぐそこに……！
「み、見るだけなら……っ」
キグナスは、絞り出すように呟く。
たったその一言で、ハルの機嫌は直ったようだ。
「そう。やっぱり見たいんだ。そんなに言うなら特別に見せてあ・げ・る♪　この年にして男を惑わせちゃうなんて、あたしったらなんて罪な女なんでしょう！」
調子に乗ったハルは、ゆっくりと、もったいぶるようにローブに包まれた胸をはだけていく。
その様子にはロリコンではないキグナスも、視線を離すことができなくなっていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

https://ktcom.jp/